北海道コンサドーレ札幌
河合竜二C.R.C講演会

河合C.R.Cがとうべつ学園に！

とうべつ学園後期課程の生徒を対象とした道徳の授業で、北海道コンサドーレ札幌の河合竜二コンサドーレ・リレーションズチーム・キャプテン（以下、C.R.C）※がとうべつ学園体育館にて講演を行いました。

「河合竜二流　夢の叶え方」と題した講演では、これまでのサッカー人生を通して河合 C.R.C が経験したことを語り、生徒たちは数多くの質問を投げかけ、真剣な表情でお話しに耳を傾けていました。

講演後は、９年生から２名が生徒を代表して河合 C.R.C とパス交換やリフティングを行い、緊張しながらも元プロ選手の実力に直に触れ、感激している様子でした。

最後に河合 C.R.C お馴染みの「Excellent」のポーズで記念撮影をし、交流を存分に楽しんでいました。

※スポンサーや行政、メディア、ファン、サポーターなど
クラブを支える関係者各位とコンサドーレを繋ぐ存在

ボールの置きどころについて
指導を受ける生徒たち

河合C.R.Cお馴染み
「Excellent」のポーズで記念撮影

生徒たちからの質問を紹介します

―学生時代、勉強は得意でしたか。
聞かなかったことでいいですか（笑）平均的で、サッカーだけやっていればいいと思っていましたが、今はもう少し勉強しておけば良かったと感じています。勉強が苦手な子もいると思いますが、いつか役に立つと思いますし、苦手なことに立ち向かうというのは今後の人生において大切なことです。勉強やスポーツをはじめ、様々なことに挑戦してみましょう。

―高校生になったら先輩後輩の上下関係が強くなると思います。どういうことを意識するといいですか。
かわいがられるために過度にへりくだってご機嫌をとるようなことは必要ないと思います。この先輩は何をされたら嬉しいかと考えると、人のことを考えられるようになるのではないでしょうか。また、目標とする先輩を見つけて真似をするのは、自分を成長させるためには良い方法です。良い先輩を見つけてください。

講演中の河合C.R.C

質疑応答のようす

贈呈されたサイン入りフラッグは
児童生徒玄関前に飾ってあります

INTERVIEW>>>RYUJI KAWAI

―当別町に来るのは初めてですか。
公私ともに初めてです。行き先の名産や美味しい物を食べに行くようにしていて、今日はかばと製麺に行きましたが、まさかの休業日でした（笑）

―とうべつ学園の校舎を訪れてみていかがですか。
体育館の設備もよく、グラウンドも広く、武道場や更衣室があって、とても綺麗で驚きました。また、道内各地を巡っていますが、義務教育学校というのはあまり見たことがありません。とても良い環境で、町としてもシンボルになるのではと思います。

―とうべつ学園の生徒と触れ合った感想は。
最初はお互い緊張してどこか遠慮がちでしたが、素直に聞いてくれていました。最後の質疑応答では、これまでに訪れたどの学校よりも手が上がったのではないかと思います。とても積極的に関わってくれました。なかなか他では聞けない質問もあり、今置かれている状況が目に浮かびました。自分自身のためにもなりましたね。

―今日の講演テーマは「夢の叶え方」でしたが、河合C.R.C自身の夢はなんでしょうか。
北海道にコンサドーレを根付かせることが夢であり目標です。こういった各地での講演やサッカー教室など、今できることを最大限に行うことで、少しでも自分の力を北海道に還元し、北海道を盛り上げたいという想いで活動をしています。

―そのためにも行政と連携してどのように地域づくりをしていきたいですか。
市町村が抱えている課題や問題を解決できるよう、お手伝いをしたいと考えています。幸い今は連携市町村も増えてきて、少しずつ仲間を増やすことができています。コンサドーレには、サッカーだけではなく、バドミントン、カーリング、女子サッカーなど様々なコンテンツがあるので、何でも使っていただければと思います。

―コンサドーレの選手を目指す子どもたちへ。
北海道全域で少子化や部活動移行などが問題になっていて厳しい環境ではありますが、その中でも自分で磨けることはあります。当別町からコンサドーレのアカデミーに加入する選手もいると思います。向上心を持って、自分の目標のために努力し続けてください。皆さんのためにトップチーム、アカデミー含めてコンサドーレの存在意義がありますので、様々な発信をコンサドーレでもできればと思います。

―前期課程や西当別小・中学校の児童・生徒へ。
恥ずかしがらずに夢や目標を持ち、それを発信していくことが大切です。また、日頃の努力を継続し、常に目の前のことや辛いこと、嫌なことも自分のためになると思って全力で取り組むことを人生を通してやってきて良かったと私は思っています。同じようにするのが良いとは限りませんが、皆さんのヒントになれば嬉しいです。

―広報とうべつの読者へ。
このような講演を通して、コンサドーレが少しでも皆さんの目に留まってくれたら嬉しいです。北海道を代表するプロスポーツのパイオニアとして、コンサドーレは様々なコンテンツを使いながら北海道を活気づけ、豊かにし、北海道のためになる活動をしていきます。皆さんぜひコンサドーレの応援にきてください！

北海道コンサドーレ札幌の
最新情報は公式ホームページへ

河合竜二（かわい・りゅうじ）
1978年7月14日、東京都生まれ。1997年、西武台高校を卒業し、浦和レッズへ入団。2003年、トライアウトを経て横浜F・マリノスへ加入し、2年連続のJリーグ優勝やのちにキャプテンを務めるなど主力として活躍。2011年にコンサドーレ札幌（当時）へ移籍。初年度からキャプテンとしてチームをまとめ、2度のJ1昇格、16年振りのJ1残留に貢献。2018年に現役引退。現在は、北海道コンサドーレ札幌のフロントスタッフに就任し、C.R.Cそして一般社団法人コンサドーレ北海道スポーツクラブ スポーツダイレクターとしてクラブと北海道を繋ぐ。また、コンサラボ（UHB）では所長、CONSA Ole（FM NORTH WAVE）ではDJとしてレギュラー出演中。

とうべつ歴史余話

第37回 当別青山地区開発物語

北海道史編さん委員 大藤 寛之

青山中央、二番川、三番川、四番川の各地区では、1895（明治28）年頃から入植が始まった。1904（明治37）年に浜益道路が大袋まで開通したことで交通の利便性が良くなり、1935（昭和10）年には青山奥では138戸、二番川では51戸、奥当別では41戸が居住していた（『當別村史』）。

太平洋戦争が始まった1941（昭和16）年、石狩支庁は当別村青山奥以北の当別川上流原野開発計画を策定した。当別町に寄贈された吾妻家文書の中に『石狩郡當別村當別川上流原野開発計画書』という小冊子があり、次のような開発の大意が書かれている（原文は漢字カナ交じりの漢文調であるが、現代文に改めた）。

「対象地域の道路網を整備し、民有未利用地に150戸の農民を入植させる。農業畜産を基幹産業として、集落を形成することで、戦時体制下の資源開発などに応えていく」

具体的には、当別川上流地帯（総面積2万860町歩）に自作農を入植させ、水田、畑、宅地、植林地などを開発し、周辺道路を開削、整備するとされていた。また、住宅建設や集落の医療従事者などに助成金を支給するとともに、貨物自動車、共同倉庫を貸し出すという計画もあったが、これらはついに実施されることはなかった。

しかし、計画から5年後、この地域の開発は緊急開拓事業によって実現する。1946（昭和21）年9月、戦災者、引揚者の増加、食糧不足という終戦後の状況下で、当別村開拓地調査会による民有未利用地約2172.47haの買収計画が策定され、移住者による入植が行われることとなったのである。

この結果、1955（昭和30）年までの間に、一番川から四番川までの地域で合計273戸の移住があった。移住者の出身地は満州、朝鮮半島、道内各地、樺太、広島、青森などであった。こうした開発を支えるため、1952（昭和27）年に殖民軌道が大袋まで開通し、1954（昭和29）年にラジオ共同聴取施設が設置された。その翌年には二番川まで中央バスが運行を開始し、また当別農協経営電気供給事業により送電が開始されるなど、生活環境が整っていった。

『当別町史』によると、二番川への移住者は満州、朝鮮半島からの引揚者が多く、入植地では自給用の野菜を作るのが精一杯だった。また四番川に入植した者は、はじめは食糧不足に苦しみながら冬山造材で生計を立てたという。こうした苦労を経て、1960（昭和35）年には合計640町歩が開墾された。

当別ダムの建設にともない姿を消した集落には、このような歴史があったのである。

青山中央小中学校の児童生徒らが、長寿園に山菜をプレゼントした（平成5年5月31日）。

子どものための演奏会をこれからも続けたい

橋本 友紀さん

ここに書ききれないエピソードや写真は当別町ホームページ「現代を活きる＋」でご覧ください。

今回は、マリンバ奏者として数多くのコンサートで演奏し、日本クラシック音楽コンクール全国大会への出場経験もある橋本友紀さんに話をお聞きしました。

打楽器に惹かれて

網走市出身で、短期大学に入学するのと同時に札幌に移住し、2016年に夫の勤務先である当別町に移り住みました。

音楽を始めたのは４歳の時で、親や周りの影響を受けてピアノを始めました。その後、高校卒業後の進路に悩んでいたとき、ピアノの先生から「迷っているなら音楽を続けてはどうか」とアドバイスを受け、札幌大谷大学短期学部に入学し、音楽科教育コースでピアノを専攻。

そんな中、教員免許を取得するためにピアノ以外の楽器を履修する必要があったので打楽器を選び、練習を始めました。授業では打楽器だけで演奏するコンサートが開かれることがあり、気が付けば打楽器の方を一生懸命に練習し、最終的には打楽器科に転科し修了しました。

マリンバとは

マリンバの原型は大昔にアフリカで生まれ、中南米を経由してアメリカに渡り、100年ほど前に現在の形になったといわれています。

特徴として、ピアノと同じ鍵盤の並びをしているため、メロディラインを弾くことができるほか、木の深い音を出すことができます。

演奏することの面白さ

ソロの演奏では自分が表現したいことを理解し、その想いを音楽に乗せることの楽しさと難しさが同時に存在します。こうだと思って弾いてみても、録音を聴いてみると「こんな弾き方をしていたのか」と、想像していたものとは違う結果になることがあり、軌道修正をする作業が大変なのも、また楽しみの一部です。

マリンバは楽器が出来てまだ歴史が浅く、マリンバのために書かれた曲は現代音楽と分類されるメロディを持たない曲が多いですが、自分の表現を作ることの難しさも楽しさの一つだと思います。

また、短期大学を卒業した後は「ムジカムボンテ」という音楽グループに所属し、子ども向けの演奏会や高齢者施設に出向き演奏を披露しています。アンサンブルでの演奏は、様々な楽器と呼吸を合わせて一つの音楽を作るのがソロにはない楽しさです。

ムジカムボンテのメンバー

これからの目標

当別町に移住してからは、出産を機に子育てサロンの先生からお誘いを受け、子どものための演奏会を何度か開いています。北海道は、０歳から聴ける音楽会は少ないのでこれからも続けていきたいのと、当別町でマリンバの自主コンサートを開きたいです。また、音楽との楽しいふれあいを通じて、基礎的な音楽能力を育てるリトミック講師の資格を持っているので、子ども達に音楽を教えるための教室も開きたいと考えています。